

平成30年度 開講科目の授業題目・内容と担当教員

目 次

科目番号	科目名	担当教員名	ページ
18001	外国語仏教学論著講読	落合 俊典 教授	3
18002	外国語仏教学論著講読	後藤 敏文 教授	4
18003	外国語仏教学論著講読	斉藤 明 教授	5
18004	外国語仏教学論著講読	デレアヌ フロリン 教授	5
18005	外国語仏教学論著講読	藤井 教公 教授	6
18006	論文指導	落合 俊典 教授	7
18007	論文指導	後藤 敏文 教授	8
18008	論文指導	斉藤 明 教授	8
18009	論文指導	デレアヌ フロリン 教授	9
18010	論文指導	藤井 教公 教授	9
18011	仏教文献学方法論	落合 俊典 教授	10
18012	仏教文化学方法論	宮本 久義 講師	11
18013	南・東南アジア仏教文献学研究	デレアヌ フロリン 教授	12
18014	南・東南アジア仏教文献学演習	デレアヌ フロリン 教授	13
18015	南・東南アジア仏教文献学演習	Michael Witzel 客員教授	14
18016	内陸アジア仏教文献学研究	斉藤 明 教授	15
18017	内陸アジア仏教文献学演習	斉藤 明 教授	16
18018	東アジア仏教文献学研究	藤井 教公 教授	17
18019	東アジア仏教文献学演習	落合 俊典 教授	18
18020	東アジア仏教文献学演習	藤井 教公 教授	18
18021	汎アジア仏教文化学研究	後藤 敏文 教授	19
18022	汎アジア仏教文化学演習	後藤 敏文 教授	20
18023	近現代仏教研究 (仏教学と生命倫理)	土山 泰弘 講師	22
18024	近現代仏教研究 (仏教学と環境問題)	土山 泰弘 講師	23
18025	比較宗教・比較文化	藤森 馨 講師	24

科目番号	科目名	担当教員名	ページ
18101	仏教学特殊研究（夏学期）	藤井 教公 教授（代表）	25
18102	仏教学特殊研究（冬学期）	斉藤 明 教授（代表）	26
18103	日本語Ⅰ	宮田 聖子 講師	27
18104	日本語Ⅱ	宮田 聖子 講師	28
18105	古文・漢文読解Ⅰ	田戸 大智 講師	30
18106	古文・漢文読解Ⅱ	小島 裕子 講師	31
18107	サンスクリット語	後藤 敏文 教授	33
18108	古典チベット語	斉藤 明 教授	34

科目番号	18001
科目名・単位数	外国語仏教学論著講読 4単位
時限	木曜日3時限目
担当教員氏名	落合 俊典 教授
授業題目	湯用形著『漢魏両晋南北朝仏教史』第1章(継続)
授業の目的・概要	前年度に引き続き、近代中国仏教史学の泰斗湯用形の『漢魏両晋南北朝仏教史』を取り上げる。 湯用形は、欧米の批判的かつ文献学的方法論を取り入れていることからその原典博捜は徹底している。本書を読解していくことによって原典の位置づけとその思想的意味が十分に理解されるようにしていく。
到達目標	中国仏教史研究の代表的本書の講読を通じて文献資料の取り扱いに習熟することが到達目標である。湯用形の著述は南北朝(六朝)までであるので隋唐五代宋元明清は範疇内では無いが、随時説明していくので中国仏教史研究の基本的文献の全体的把握は可能である。
授業計画	担当箇所を受講者が順次受け持ち、読解に取り組む。基本的な読解の方法は、講義室に備え付けられた叢書・全集等の研究参考書を実際に用いることで速やかに身に付くようになる。 受講者は引用原典の比定にあたって原文を直接調べるのが肝要である。CBETAやSAT等のテキストデータだけに頼って読解することは慎まなければならない。夏学期：①湯用形の学問。②中国仏教史研究の問題点。③湯用形と塚本善隆。④中国仏教史の基礎文献。⑤同つづき。⑥『漢魏両晋南北朝仏教史』概説。⑦同書第2章輪読(担当者決定)。⑧輪読つづき。⑨輪読つづき。⑩輪読つづき。⑪輪読つづき。⑫輪読つづき。⑬輪読つづき。⑭輪読つづき。⑮レポート試験。 冬学期：①輪読つづき。②輪読つづき。③輪読つづき。④輪読つづき。⑤輪読つづき。⑥輪読つづき。⑦輪読つづき。⑧輪読つづき。⑨輪読つづき。⑩輪読つづき。⑪輪読つづき。⑫輪読つづき。⑬輪読つづき。⑭輪読つづき。⑮レポート試験。
授業の方法	担当箇所を受講者が順次受け持ち、読解に取り組む。基本的な読解の方法は、講義室に備え付けられた叢書・全集等の研究参考書を実際に用いることで速やかに身に付くようになる。 受講者は引用原典の比定にあたって原文を直接調べるのが肝要である。CBETAやSAT等のテキストデータだけに頼って読解することは慎まなければならない。
成績評価方法	レポートに平常点(授業への積極参加)を加味して通年評価
テキスト	湯用形著『漢魏両晋南北朝仏教史』
参考文献	鎌田茂雄著『中国仏教史』第1巻～第2巻(東大出版会) 『定本中国仏教史』第1巻～第2巻(柏書房)
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	予習には2時間、復習には2時間の時間をかけること
履修上の注意	講義・演習に関する事項をよく調べ、十分な学術知識の習得に努めることが望ましい。
連絡方法	開講時にメールアドレスを通知。

科目番号	18002
科目名・単位数	外国語仏教学論著講読 4単位
時限	木曜日5時限目
担当教員氏名	後藤 敏文 教授
授業題目	サンスクリット講読
授業の目的・概要	比較的易しいテキストを材料に、サンスクリット語文法の各事項を復習確認しながら学ぶ。シンタクス(統語論)、複合語などについては、その都度新たに説明を加える。基礎的な参考書、研究書などについて、折に触れて紹介解説する。
到達目標	サンスクリット語の原文を自力で調べ、翻訳できる能力を身につける。
授業計画	<p><b>前期</b></p> <p>1 導入と序論。教材準備と内容解説。デーヴァナーガリー文字復習。 2-6 『マハーバーラタ』からナラ王物語, Lanman, pp. 1-4。 7-12 同, p. 16 まで。 13-15 『ヒトーパーデーシャ』から: Lanman, pp. 16-20。</p> <p><b>後期</b></p> <p>1-8 『ヒトーパーデーシャ』のはじめから、できるだけ多くを読む。 9-15 能力の達成次第により、古ウパニシャッドを取り上げる。</p>
授業の方法	はじめのうちは、Lanman の Notes (297ff.) の注記を忠実正確に追って進める。Whitney の文法書に対する指示を追って、文法を復習。基本的には Lanman の Sanskrit-English Vocabulary (111-292) を辞書として用いる。デーヴァナーガリーをローマ字に置き換えたものを各自準備して出席すること。出席者全員に、順番に1詩節(または、一文)ずつ、音読、逐語訳をしてもらい、その後、解説と質疑を行う。予習が間に合わなかった時にも、かまわず出席すること。前期終了時までに辞書等を用いる準備をしておく。
成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	Ch. R. Lanman, <i>Sanskrit Reader</i> , Boston 1906 (インド, 英国からのリプリント多数あり。インターネットからもダウンロード可能)。 <i>Hitopadeśa</i> : インドの廉価版, または, コピーを用意する。 <i>Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad IV 4, Chāndogya-Upaniṣad VI</i> : コピーを用意する。
参考文献	W. D. Whitney, <i>A Sanskrit Grammar, including both the classical language, and the oldest dialects, of Veda and Brahmana</i> . Leipzig 1896 以降 Harvard University Press ほかから再版多数。 J. ゴンダ著, 鎧淳訳『サンスクリット語初等文法』春秋社 1989+ A. A. Macdonell, <i>A Sanskrit Grammar for Students</i> , 3 <sup>rd</sup> ed., London 1927 (インド, イギリスからのリプリント版多数あり) Toshifumi Gotō, <i>Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background</i> , Wien 2013 C. Cappeller, <i>A Sanskrit-English Dictionary</i> , Strassburg 1891 (イギリス, インド, 日本のリプリント, あり。インターネットからもダウンロード可能) M. Monier-Williams, <i>A Sanskrit Dictionary</i> , Oxford 1899 (再版多数)
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	予習には授業内容を理解するための準備として2時間程度を予定する。初めのうちは、デーヴァナーガリー文字のローマ字転写に時間を要するので、より長い時間が必要となる。復習には、2時間程度を目安に十分時間をかけること。疑問点があれば、次回授業時、または、その他の時間に質問すること。
履修上の注意	集中的に準備、復習を行い、いたずらに時間を懸けないこと。わからない点は積極的に質問されたし。同じ間違い、質問を繰り返すことは一向に差し支えない。頭に定着するまで繰り返すこと。説明解説も、同様の内容が繰り返されることが多い。予習が十分間に合わない場合にも出席し、復習の上、質問することが望ましい。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18003
科目名・単位数	外国語仏教学論著講読 4単位
時限	金曜日5時限目
担当教員氏名	斉藤 明 教授
授業題目	J. Takasaki, <i>An Introduction to Buddhism</i> 講読
授業の目的・概要	本書は著者による『仏教入門』（東京大学出版会）を Rolf W. Giebel が英訳した名著で、仏教の教理と歴史を通観する格好の仏教入門書である。本講義では、とくに仏教術語の現代語訳（英訳、日本語訳）をめぐる諸問題を分析・考察しながら授業を進める。
到達目標	仏教の教理と歴史の概要を英文で読み、考え、的確に理解することを目指す。
授業計画	夏学期 1 Introduction 2-7 The Path to Enlightenment 8-10 Mind: The Agency of Practice 11-15 The Ideal Practitioner 冬学期 1-2 Review and Introduction 3-7 The Precepts and the Organization of the Community 8-13 The History of Buddhism 14-15 Discussion
授業の方法	講義と演習を交えながら講読を行う。必要な関連資料は、随時配布する。参考文献ならびに関連研究は授業の中で紹介する。授業は英語を基本とするが、必要に応じて日本語でも対応する。
成績評価方法	平常点およびレポートにより、通年で評価。
テキスト	J. Takasaki, <i>An Introduction to Buddhism</i> , Tokyo: The Tōhō Gakkai, 1987. その他は、随時プリント配布する。
参考文献	授業の中で紹介する。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には3時間、復習には1時間の時間をかけること
履修上の注意	地道な予習と、コンスタントな授業出席を望んでいる。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18004
科目名・単位数	外国語仏教学論著講読 4単位
時限	金曜日4時限目
担当教員氏名	デレアス フロリン 教授
授業題目	Yogācāra Buddhism: Philosophical Foundations 瑜伽行派の根本教義
授業の目的・概要	The seminar focuses on the classical system of Yogācāra-Vijñānavāda philosophy expounded by Vasubandhu in his masterpiece <i>Triṃśikāvijñaptimātratāsiddhi</i> . 唯識三十頌. We shall also read and compare relevant passages from Sthiramati's <i>Triṃśikāvijñaptibhāṣya</i> 唯識三十頌釋 and Dharmapāla's <i>*Vijñaptimātratāsiddhiśāstra</i> 成唯識論. This will not only help gain a better understanding of the original but will also reveal the unique interpretative perspectives and doctrinal innovations of each commentator.
到達目標	-- Gain detailed knowledge concerning the philosophical foundations of the Yogācāra-Vijñānavāda school. -- Deepen understanding of historical background of Indian Buddhism. -- Familiarise with academic English for Buddhist studies. -- Improve English skills (mainly reading but also paying attention to the development of listening, speaking, and writing abilities).

授業計画	-- Improve reading/translation skills in canonical languages. Summer Semester 夏学期 (1)-(2) Introduction to the history of Yogācāra Buddhism (3)-(4) Vasubandhu: Dating, Corpus, and Philosophical Development (5) Post-Vasubandhu Yogācāra, focusing on Sthiramati's <i>Triṃśikā-vijñaptibhāṣya</i> and Dharmapāla's <i>*Vijñaptimātratāsiddhīśāstra</i> (6)-(9) Vasubandhu, <i>Triṃśikā</i> ver. 1-5 with relevant passages from the commentaries [same hereafter] (10)-(12) Vasubandhu <i>Triṃśikā</i> ver. 5-10 (13)-(15) Vasubandhu <i>Triṃśikā</i> ver. 11-14 Winter Semester 冬学期 (1)-(3) Vasubandhu <i>Triṃśikā</i> ver. 15-18 (4)-(6) Vasubandhu <i>Triṃśikā</i> ver. 19-21 (7)-(9) Vasubandhu <i>Triṃśikā</i> ver. 22-25 (10)-(12) Vasubandhu <i>Triṃśikā</i> ver. 26-28 (13)-(14) Vasubandhu <i>Triṃśikā</i> ver. 29-30 (15) Review
授業の方法	In the first part of the summer semester, from classes (1) to (5), I shall give lectures on the subjects mentioned above. In the second part, from class (6) on, participants are expected to prepare in advance the materials we are scheduled to cover.
成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	S. Lévi ed. <i>Vijñaptimātratāsiddhi</i> H. Buescher ed. <i>Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation</i> 玄奘譯『唯識三十頌』(Taishō ed. Vol. 31) (Handouts containing relevant materials will be distributed in class.)
参考文献	宇井伯壽『唯識三十頌釋論』 山口益、野澤清證『世親唯識の原典解明』 J. Gold, <i>Paving the Great Way: Vasubandhu's Unifying Buddhist Philosophy</i> S. Anacker, <i>Seven Works of Vasubandhu</i> (An extensive bibliography will be provided in the class.)
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	予習: 2時間 復習: 2時間
履修上の注意	Participants must have basic knowledge of English and at least one canonical language.
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18005
科目名・単位数	外国語仏教学論著講読 4単位
時限	火曜日2時限目
担当教員氏名	藤井 教公 教授
授業題目	Kazuo Kasahara ed., <i>A History of Japanese Religion</i> 講読
授業の目的・概要	本書は日本の宗教について、その歴史から教理の概要までを記述した書で、大部ではあるが文章は平明で内容的にも信頼が置ける。本書の講読によって日本仏教形成の過程と、その発展、さらにその基盤としての日本宗教思想全体について理解を深めることを目的とする。
到達目標	テキストは日本仏教史の概説書としては内容的に詳細な記述がなされているので、本書を講読することによって新知見を増し、さらにそこから発展して受講者自身が問題意識を持ってあるテーマを見つけ、文献資料の調査、研究にまで進むことを目標とする。
授業計画	第4章 平安仏教の The Kannon Cult (p.136) から読み始める。 第1~4講 The Kannon Cult 第5~6講 The Jizo Cult

	第7～8講 Shinto Buddhist Syncretism Two Types of Syncretism 第9～10講 Deities and Buddhas 第11～13講 Tie Honji Suijaku theory 第14～19講 Taoism and Shugendō Asceticism Taoism in Japan 第20～21講 Shugendō 第22～26講 The Religious Life of Villages Popular Preachers 第27～28講 Criteria for Rebirth 第29～30講 第5章 The Birth of Kamakura Buddhism Characteristics of Kamakura Buddhism Choice, Exclusive Practice, and Easy Practice
授業の方法	あらかじめ担当者を決めて講読していく。単にテキストを読んで訳すだけでは意味がないので、担当者はテキストの記述内容自体について、あるいはその背後にある問題について、自身が考え、調べたものを発表してもらいたい。
成績評価方法	出席率を含む平常点にて通年で評価
テキスト	Kazuo Kasahara ed., <i>A History of Japanese Religion</i> 教場でコピーを配布する。
参考文献	教場でテキストの内容毎に指示する。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には2時間半程度、復習には1時間半程度の時間をかけること。
履修上の注意	出席励行のこと。担当者は発表原稿を人数分用意する。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18006
科目名・単位数	論文指導 4単位
時限	火曜日3時限目
担当教員氏名	落合 俊典 教授
授業の目的・概要	学位論文の執筆におけるテーマ設定から内容の指導、体裁、参考文献の取り扱い方、提出までに必要な事項等を教授する。
到達目標	仏教文献学の方法を習得すること。仏教文献は様々な言語で書かれていることから基本的言語の習得の上に研究テーマを設定し、論文を書けるようになることが目標である。
授業計画	最初に研究テーマの設定に関して討論を重ね、具体案作成へ向けて、いくつかのレポートを作成していく。次いで受講生は、先行研究論文を読破し、先行研究の問題点についてレポートの提出が求められる。このレポートを基に新たな観点や新発見の可能性について論議検討し、研究テーマの絞り込みに努める。夏学期：①研究論文の書き方。②研究の方法論。③研究資料の探索方法。④外国語文献の探索方法。⑤研究テーマの選定。⑥複数の研究テーマ。⑦研究テーマのデッサン。⑧研究チャートの作成。⑨研究文献のフィールドワーク。⑩研究テーマ討論。⑪研究テーマ変更の方法。⑫研究会の案内。⑬学会の案内。⑭発表の方法。⑮発表。討論。冬学期：①発表と討論の方法。②討論の文句。③先行研究の徹底的解説。④外国語先行研究の解説方法。⑤当該研究者の見つけ方。⑥文字資料の扱い方。⑦活字本と刊本。⑧刊本と写本。⑨写本の読解方法。⑩写本の所在。⑪写本の探索方法。⑫写本に関する書誌学的知識。⑬文献学。⑭文献学の確立。⑮発表と討論
授業の方法	受講生の研究してきたレポートについて適宜問題点を指摘し、レベルアップを図る。また重要資料を図書館その他から取り寄せ、その解説を行い、実践的かつ重厚な読解力研究力を養成していく。
成績評価方法	平常点（論文指導への積極参加）にて通年評価
テキスト	研究テーマが定まり次第テキストや先行研究論文の集成の指導を行う。
参考文献	研究テーマ決定に従って参考文献を探索する。参考文献の探し方についても指導を行う。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には2時間、復習には2時間の時間をかけること

履修上の注意	研究テーマに関する事項をよく調べ、十分な学術知識の習得に努めることが望ましい。
連絡方法	初回の授業でメールアドレスを通知。

科目番号	18007
科目名・単位数	論文指導 4単位
時限	木曜日4時限目
担当教員氏名	後藤 敏文 教授
授業の目的・概要	学位論文作成に向けて、主題の具体化、問題の設定、章の構成、方法、必要文献、原典の本文確定、翻訳、解釈などに亘り、個別に指導する。論文とその後の研究とにおいて、独立した研究者として学界に貢献できるよう訓練を目指す。
到達目標	学位論文完成に向けた研究計画に従って、その各段階を実現する。
授業計画	テーマや指導内容が具体的になってから、個別に協議検討の上決定する。
授業の方法	研究計画、研究遂行について、議論と指導を行う。取り上げる原典(テキスト)を個々に点検しながら論文完成に向かって共に努力する。毎週1回の授業時間に研究計画とその実現状況を確認し、それ以外の時間にも適宜協議検討を行う。
成績評価方法	平常点にて通年で評価。
テキスト	論文作成者の題材に従う。
参考文献	論文作成者の題材に従って網羅的に点検し、有用性に応じて吟味を加える。
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	平時、論文作成に向かって全力を傾けること。準備や補足作業については、一々の協議の上、指示指導に努める。この性格上、論文指導の時間のために特別の予習復習の時間をとるよりも、使える時間とエネルギーは全て論文作成のために注ぐこと。
履修上の注意	合理的研究計画と、積極的かつ着実な研究遂行に留意する。常に連絡が取れるようにし、時間を無駄にしないこと。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18008
科目名・単位数	論文指導 4単位
時限	火曜日4時限目
担当教員氏名	斉藤 明 教授
授業の目的・概要	学位論文の執筆に際してのテーマの設定、研究に必要な資料や参考文献の収集、適切な研究方法などを指導する。
到達目標	学位論文に関する毎回の報告と指導を踏まえ、関連する学術論文の作成方法を学んだ上で、学位論文の完成を目ざす。
授業計画	夏学期 1 導入と解説(論文とは何か:目的、方法等) 2 論文のルール 3 学位論文のテーマ設定をめぐって 4-15 報告と議論、および指導 冬学期 1 進行状況の報告と展望 2-15 報告と議論、および指導
授業の方法	学生が用意してきたレポートや研究の部分的な成果をもとに、コメントと質疑応答、ならびに討論を交えながら授業を進める。
成績評価方法	平常点により、通年で評価。

テキスト	必要に応じて授業の中で指示する。
参考文献	授業の中で紹介する。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には5時間、復習には1時間の時間をかけること
履修上の注意	論文の完成に向けた地道な取り組みが期待される。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18009
科目名・単位数	論文指導 4単位
時限	金曜日5時限目
担当教員氏名	デアヌ フロリン 教授
授業の目的・概要	PhD tutorials are designed to help doctoral students to write their theses. Apart from reading and analysing the primary and secondary sources relevant to the topics, the students are required to submit drafts or sections of their theses three to four times per semester. We shall examine and discuss together specific problems and strategies necessary for addressing them.
到達目標	Each semester must be a clear step (preferably measurable in number of pages) in the process of writing the MA or PhD thesis.
授業計画	To be decided with each individual student
授業の方法	Each student is required to prepare beforehand the materials which we discuss in class. When scheduled to submit a draft, the student is required to send it to me a week in advance by e-mail.
成績評価方法	平常点並びにレポート（論文）にて通年で評価
テキスト	To be decided with each individual student
参考文献	To be decided with each individual student
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習: 8時間程度 復習: 2時間程度
履修上の注意	An MA thesis should be a solid study/edition/translation, clearly argued and showing familiarity with the basics of the research topic. A PhD thesis must be an original contribution to a particular area of Buddhist studies based upon meticulous philological work and in accordance to the highest scholarly standards.
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18010
科目名・単位数	論文指導 4単位
時限	水曜日2時限目
担当教員氏名	藤井 教公 教授
授業の目的・概要	学位論文執筆のためのテーマの選択から、執筆完成に至るまでの全過程における事柄について教授する。論文テーマの選定、先行業績の調査、文献資料の渉猟と蒐集の手法、選定資料の読み込み、執筆内容の吟味などについて、受講者のそれぞれのテーマ、それぞれの段階に応じて指示し、論文の完成を目指す。
到達目標	受講者それぞれの修士論文、博士論文の完成を目指す。
授業計画	第1～5講 テーマの選択・設定に関する指導 第6～9講 テーマに関わる先行業績文献資料の読み込み 第10講以降 執筆内容の吟味と指導

授業の方法	授業日、授業時間はあらかじめ設定されているものの、受講者との話し合いにより、双方の都合で決定する。そのためあらかじめの打ち合わせが必要である。
成績評価方法	平常点（出席率を含む）にて通年で評価
テキスト	受講者各自が論文作成のために取り上げた文献資料、及びテーマに応じた必須文献資料を用いる。
参考文献	執筆論文の内容に応じて、その都度指示する。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には2時間以上、復習にも2時間程度の時間をかけること
履修上の注意	毎回、指導時間をあらかじめ担当教員と打ち合わせること。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18011
科目名・単位数	仏教文献学方法論 4単位
時限	水曜日2時限目
担当教員氏名	落合 俊典 教授
授業題目	金剛寺聖教の『法門名義集』—日本中世の仏教辞書—
授業の目的・概要	<p>仏教文献学の基礎的方法論は、写本で伝わる仏教文献を正確に翻刻することから始まる。紙質・形態・文字等を勘案しつつ文意の把握に注力していく。一字一字、一句一句、丁寧にその由来を考察することが肝要である。それは文章が多く先行する書物を典故にして書かれているからである。</p> <p>未知の文献に取り組み、その仏教文化的背景を探る妙味を味わってきたい。</p>
到達目標	<p>仏教文献学の基礎的方法論は、写本で伝わる仏教文献を正確に翻刻することから始まる。紙質・形態・文字等を勘案しつつ文意の把握に注力していく。一字一字、一句一句、丁寧にその由来を考察することが肝要である。それは文章が多く先行する書物を典故にして書かれているからである。</p> <p>未知の文献に取り組み、その仏教文化的背景を探る妙味を味わってきたい。</p>
授業計画	<p>夏学期：①文献の法量について。②文字の書体と辞書。③紙質の違い。④異体字・俗字・くずし字の理解。⑤翻刻凡例。⑥翻刻の仕方。⑦当該写本の概要把握の方法。⑧各自分担して翻刻する。⑨～⑮輪読演習。</p> <p>冬学期：①当該文献の概要把握。②書名の検討。書籍目録の調査③先行研究の有無。④外国語先行研究の有無。⑤当該写本の宗派的分類。⑥当該写本の成立年代。⑦～⑮写本の訳注研究。</p>
授業の方法	<p>演習形式で授業を進める。各自担当箇所の校訂・読解研究を準備してきてレジメを受講生の人数分コピーし配布する。担当していない受講生各人も共通理解のために積極的に発言することが望まれる。授業にあたっては基本的な辞書等の参考書を各人の机の上に置き、ノートパソコンを学内ネットにつなぎ、SATやCBETAなどにつないで異読を確認する。</p> <p>なお、通常、電子辞書は有用であるが、旧漢字（正字）使用に慣れるために電子辞書の使用は禁止する。</p>
成績評価方法	平常点（論文指導への積極参加）にて通年評価
テキスト	当該文献をコピーして配布。
参考文献	<p>科研報告書『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』2分冊（代表者落合俊典）</p>
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には2時間、復習には2時間の時間をかけること
履修上の注意	研究テーマに関する事項をよく調べ、十分な学術知識の習得に努めることが望ましい。
連絡方法	初回の授業でメールアドレスを通知する。

科目番号	18012
科目名・単位数	仏教文化学方法論 4単位
時限	火曜日5時限目(夏学期) 火曜日4時限目(冬学期)
担当教員氏名	宮本 久義 講師(東洋大学 客員教授)
授業題目	道をめぐるインド文化論
授業の目的・概要	<p>【目的】人はなぜ移動するのかという問題は、人間の歴史的・文化的営為を読み解くための重要なポイントであり、道はそのキーワードのひとつであると考えられる。道は、民族移動の道、交易の道、巡礼や求法の道、文化伝播の道、民族独立の道などさまざまな要素を持っている。いろいろな地図を見ながら、そこにあらわれるさまざまな歴史と文化の問題を一緒に考えていきたい。</p> <p>【概要】釈尊ブッダの求道と伝道の道や、法顕・玄奘・義浄など求法僧の辿った道を手始めに、スリランカやアフガニスタンへの仏教の伝播などを概説する。また、仏教の八大霊場と比較する意味で、ヒンドゥー教の聖地の分類やその特徴を考察しつつ、仏教とヒンドゥー教の複合的聖地であるカイラーサやヴァーラーナシーの現在の聖地信仰の実態にも触れる。さらに、イブン・バットゥータの『三大陸周遊記』やマルコ・ポーロの『東方見聞録』、鄭和の西洋下りの記録『瀛涯勝覧』などを資料として、イスラームやキリスト教とインドの地との関係にも触れる予定である。</p>
到達目標	インドを中心とする南アジアを対象として道の文化史を考えると、そこにはその地域的特殊性ととも、全世界に共通する普遍性も浮かび上がってくるであろう。それらを理解し、地理・歴史と文化・思想が緊密に結びつく様相を分析・考察できるようになることを目標としたい。
授業計画	<p>夏学期</p> <p>第1回：南アジアのトポロジー</p> <p>第2回：先史以来の道の動態</p> <p>第3回：古代インドの道</p> <p>第4回：ブッダの求道と伝道の道</p> <p>第5回：『法顕伝』とその関連資料</p> <p>第6回：『法顕伝』に見る法顕のたどった道</p> <p>第7回：『法顕伝』における地名同定の問題点</p> <p>第8回：『南海寄帰内法伝』とその関連資料</p> <p>第9回：『南海寄帰内法伝』に見る義浄のたどった道</p> <p>第10回：『南海寄帰内法伝』における地名同定の問題点</p> <p>第11回：『大唐西域記』とその関連資料</p> <p>第12回：『大唐西域記』に見る玄奘のたどった道(1)</p> <p>第13回：『大唐西域記』に見る玄奘のたどった道(2)</p> <p>第14回：『大唐西域記』における地名同定の問題点</p> <p>第15回： 仏教の八大霊場</p> <p>冬学期</p> <p>第1回：ヒンドゥー教の巡礼地と巡礼路</p> <p>第2回：プラーナ聖典概説</p> <p>第3回：『マツヤ・プラーナ』等における「マーハートミヤ」</p> <p>第4回：ブッダガヤーとガヤー(1)</p> <p>第5回：ブッダガヤーとガヤー(2)</p> <p>第6回：ヴァーラーナシーとサールナート(1)</p> <p>第7回：ヴァーラーナシーとサールナート(2)</p> <p>第8回：ヴァーラーナシーとサールナート(3)</p> <p>第9回：カイラーサ山とマーナサローヴァラ湖(1)</p> <p>第10回：カイラーサ山とマーナサローヴァラ湖(2)</p> <p>第11回：イスラームの来た道</p> <p>第12回：キリスト教の来た道</p> <p>第13回：『瀛涯勝覧』に見る鄭和の西洋下り(1)</p> <p>第14回：『瀛涯勝覧』に見る鄭和の西洋下り(2)</p> <p>第15回：総括</p>
授業の方法	こちらで用意した配布資料をもとに講義を進めていく。漢文やサンスクリットの原典を使用するときには、できるだけわかりやすく解説する。

	また、文化論という性質上、ビデオやDVDなどの映像資料も多用する予定である。
成績評価方法	平常点またはレポートにて通年で評価
テキスト	教場にて資料を配布する。
参考文献	小西正捷・宮本久義編『インド・道の文化誌』春秋社、1995年 水谷真成訳『大唐西域記』平凡社、1972年 義浄撰、宮林昭彦・加藤栄司訳『南海寄帰内法伝』法藏館、2004年 長沢和俊訳註『法顕伝・宋雲行紀』平凡社、1975年 馬歡著、小川博訳注『瀛涯勝覧』吉川弘文館、1969年 その他、講義中に適宜教示する。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には1時間30分程度、復習には2時間30分程度の時間をかけること。
履修上の注意	講義中は常にインドの地図を参照し、インドの地理と文化が徹底的に頭に入るように努力していただきたい。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18013
科目名・単位数	南・東南アジア仏教文献学研究 4単位
時限	金曜日3時限目
担当教員氏名	デアヌ フロリン 教授
授業題目	The five spiritual lineages ( <i>gotra</i> ) and the <i>icchantika</i> concept in Indian Buddhism インド佛教に於ける五性格別説と一闡提思想
授業の目的・概要	We shall explore the background and development of the doctrinal currents which deny or qualify the Awakening potentiality in some categories of followers. This related, if nuanced, set of beliefs developed and received special attention in the Yogācāra and Tathāgatagarbha traditions. The seminar will focus on a few primary sources pertaining to these two currents in Indian Buddhism.
到達目標	-- Gain systematic knowledge concerning the historical background and doctrinal systems in which the <i>gotra</i> and <i>icchantika</i> concepts became central. -- Understand the methods and particularities of the study of primary sources in Indian Buddhism. -- Improve knowledge of Sanskrit, Classical Tibetan, Classical Chinese, and Classical Japanese ( <i>kundoku</i> ).
授業計画	Summer Semester 夏学期 (1) Indian Buddhism in the early centuries of the Common Era (2)-(3) Yogācāra tradition (4)-(5) Tathāgatagarbha currents (6) The concepts of <i>gotra</i> and <i>aparinirvāṇadharmaka</i> in the <i>Śrāvakabhūmi</i> (7)-(10) The concept of <i>gotra</i> in the <i>Bodhisattvabhūmi</i> (11)-(12) The concept of <i>gotra</i> in the <i>Mahāyānasūtrālaṃkāra</i> (13)-(15) The concepts of <i>dhātu</i> and <i>gotra</i> in the <i>Madhyāntavibhāga- bhāṣya</i> Winter Semester 冬学期 (1)-(4) The five spiritual lineages and two categories of <i>icchantika</i> in the <i>Laṅkāvatārasūtra</i> (5)-(8) The understanding of <i>gotra</i> in the <i>Ratnagotravibhāga</i> (9)-(14) The concept of <i>icchantika</i> in the Mahāyāna <i>Mahāparinirvāṇasūtra</i> (15) Review and discussion
授業の方法	In the first part of the summer semester, classes (1) to (5), we shall review the historical and philosophical background of the Yogācāra and Tathāgatagarbha traditions. From class (6) on, participants are expected to prepare in advance the primary sources scheduled to be read and analysed.

成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	Wogihara, Unrai ed. 1971. <i>Bodhisattvabhūmi</i> Lévi, Sylvain ed. 1983. <i>Mahāyāna-Sūtrālamkāra</i> Shukla, Karunesha ed. 1973. <i>Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga</i> Nagao, Gadjin ed. <i>Madhyāntavibhāga-Bhāṣya</i> Nanjio, Bunyiu ed. 1956. <i>Laṅkāvatāra-Sūtra</i> <i>Yong su mya ngan las 'das pa chen po'i mdo</i> (Peking ed. Vol. 31, No. 788) 法顯・佛陀跋陀羅譯『大般泥洹經』(Taishō ed. Vol. 12, No. 376) 曇無讖譯『大般涅槃經』(Taishō ed. Vol. 12, No. 374)
参考文献	保坂玉泉 1958 『五姓各別と成佛不成佛の問題』 Seyfort Rugg, David. 1969. <i>La théorie du tathāgatagarbha et du gotra</i> D'Amato, Mario. 2003. 'Can all Beings Potentially Attain Awakening?: <i>Gotra</i> -theory in the <i>Mahāyānasūtrālamkāra</i> ' Liu, Ming-Wood. 1984 'The Problem of the <i>Icchantika</i> in the <i>Mahāyāna Mahāparinirvāna Sūtra</i> ' (A more detailed bibliography will be provided in class.)
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	予習: 2時間 復習: 2時間
履修上の注意	The participants must have basic knowledge of English and at least one canonical language.
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18014
科目名・単位数	南・東南アジア仏教文献学演習 4単位
時限	月曜日5時限目
担当教員氏名	デレアス フロリン 教授
授業題目	Buddhist Philology and Codicology: Focusing on the <i>Yogācārabhūmi</i> 佛教文献学と写本研究—『瑜伽行師地論』を中心に—
授業の目的・概要	The seminar aims at improving the philological skills necessary for reading difficult passages in Sanskrit and establishing a reliable critical edition on the basis of a single or multiple manuscripts as well as by comparison with the Tibetan and Chinese translation(s). For this purpose, we shall focus on the <i>Yogācārabhūmi</i> , mainly the <i>Śrāvakabhūmi</i> Book.
到達目標	-- Deepen knowledge of Buddhist philology and canonical languages -- Build up the skills necessary for critical editions and annotated translations. -- Improve palaeographical and codicological expertise in working with Indic manuscripts -- Deepen the understanding of the Buddhist teachings and practices dealt with in the text.
授業計画	Summer Semester 夏学期 (1)-(5) Philological and codicological problems raised by critical editions and annotated translations (6)-(9) Passages from the <i>Śrāvakabhūmi</i> , Yogasthāna I (10)-(13) Passages from the <i>Śrāvakabhūmi</i> , Yogasthāna II (14) Students' presentations (samples of edited fragments) (15) Test  Winter Semester 冬学期 (1)-(4) Passages from the <i>Śrāvakabhūmi</i> , Yogasthāna III (5)-(13) Passages from the <i>Śrāvakabhūmi</i> , Yogasthāna IV (14) Students' presentations (samples of edited fragments) (15) Test

授業の方法	The participants are expected to prepare in advance the materials we are scheduled to cover. In class, we shall read and discuss the best solutions for achieving a reliable critical edition as well as the annotation conventions and methodology. For the successful completion of the seminar, it is therefore important to be very active in the class discussions. Furthermore, at the end of each semester, the students will have to prepare samples of edited fragments as well as to take tests requiring editing, translating, and annotating Sanskrit passages.
成績評価方法	「平常点およびレポートにて通年で評価」
テキスト	声聞地研究会 1998 『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処-サンスクリット語テキストと和訳-』 声聞地研究会 2007 『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処-サンスクリット語テキストと和訳-』 Shukla, Karunesha ed. 1973. <i>Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga</i> Deleanu, Florin. 2006. <i>The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study</i>
参考文献	Apart from Deleanu 2006 (see above), an updated review of editions and primary sources will be distributed in class.
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習：2時間 復習：2時間
履修上の注意	The participants must have good knowledge of Sanskrit, Classical Tibetan, Classical Chinese, and Classical Japanese. Solid knowledge of English is also necessary.
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18015
科目名・単位数	南・東南アジア仏教文献学演習 2単位
時限	集中講義 ※日程は、別途お知らせします
担当教員氏名	Michael Witzel 客員教授（ハーバード大学教授）
授業題目	The history and traditions of Kashmir
授業の目的・概要	The course deals in 15 steps from early archaeological, genetic and other sources, to early literary evidence and medieval chronicles and to more recent accounts of Kashmir, its people and culture.
到達目標	The aim of this course is to provide a multi-faceted introduction to the complex history and the multifarious linguistic, religious and cultural traditions of Kashmir, from the earliest times to the beginning of the modern era in the 1850s
授業計画	1. Prehistoric Kashmir: stone age immigration of the earliest humans; spotty archaeological excavations, influences of neighboring cultures; 40 pp. 2. Indo-Aryan (Dardic) superstrate language in the Kashmir Valley and non-researched evidence for substrate languages; Burushaski as an “isolate” language; issue of the Indo-European status of Bangani; 50 pp. 3. Earliest, incidental sources on Kashmir (Greeks, Mahabhasya, Mahabharata): Kashmir as an outlier of Hindu civilization; 40 pp. 4. Buddhist sources: canon; reports of Chinese/Korean pilgrims (400-800 CE); 100 pp. 5. Mythical Hindu ‘history’ (Nilamata Purana); layout of the country and religious topography; Pisacas, Nagas and humans competing for space, reflected literature and in rituals; 100 pp. 6. Glimpses of early Kashmir in traditional chronicles (Rajatarangini): misunderstanding them as “history” instead of Vamsavali-based data and legends; competition of Buddhism, Vaishnavism and Shaivism; 80 pp.

	<p>7. Early historical period (625 CE-): according to Rajatarangini and Chinese sources: reliable, detailed accounts of the Karkota and Utpala dynasties; 150 pp.</p> <p>8. The Golden Age of Kashmir in politics, architecture, Sanskrit literature, philosophy, and shastric texts and commentaries; 100 pp.</p> <p>9. Later “Hindu” period up to 1323/1339 CE: increasing internal divisions and strife by major landlords; 100 pp.</p> <p>10. Gradual Islamization under the early Sultans (1339-1419 CE); coexistence of Hinduism and Islam; 200 pp.</p> <p>11. Persecution of Brahmins around 1400 CE (by Sikandar and Saif ud Din / Suhabhata); 60 pp.</p> <p>12. Second Golden Age under Zain ul Abidin (1420-1470 CE): revival of Hinduism next to support for Islam; last Buddhists; 100 pp.</p> <p>13. Later Sultans: increasing strife between Sunni, Shia, Hindus and various political factions, with quickly shifting alliances; 50 pp.</p> <p>14. Mughal conquest (1586 CE): Kashmir as a territory under the Kabul province; revival of arts, crafts, commerce, religious freedoms; 150 pp.</p> <p>15. Afghans, Sikhs, and Dogras (1752-1947): successive invasions and domination by outside forces; accession to India. 200 pp.</p>
授業の方法	Lecture, text reading, discussion
成績評価方法	平常点にて各学期で評価 [Based on class performance]
テキスト	Rajatarangini by Kalhana; Nilamata Purana; Jonaraja’s and Srivara’s Rajataranginis; Mughal historians (Abu’l Fazl etc.); European travelers’ accounts; various modern histories of Kashmir
参考文献	<p>Stein, M.A. <i>Kalhana’s Rājatarāṅgīnī, a Chronicle of the Kings of Kaśmīr, translated with an introduction, commentary, and appendices</i>, 2 vols., Westminster: Archibald Constable and Company 1900</p> <p>Slaje, Walter. <i>Kingship in Kaśmīr (AD 1148-1459). From the pen of Jonarāja, court Paṇḍit of Sulṭān Zayn al-‘Ābidīn</i>. Critically edited by Walter Slaje. With an annotated translation, Indexes and Maps. Halle: Universitätsverlag Halle-Wittenberg 2014.</p> <p>Abu 'l Fazl, <i>Ain-i-Akbari</i>, transl. H.Blochmann, Calcutta 1939.</p> <p>Ved Kumari. <i>The Nīlamata Purāṇa</i>, vol. I and II. Srinagar: J. &amp; K. Academy of Art, Culture and Languages. 1968, 1973</p> <p>Ikari, Yasuke (ed.). <i>Studies on the Nīlamata-Purāṇa. – Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir</i>. Kyoto 1994.</p> <p>Bamzai A.K. <i>A history of Kashmir: political, social, cultural, from the earliest times to the present day</i>. [2d rev. ed.] New Delhi, Metropolitan Book Co. [1973]</p> <p>Sufi, G.M.D. <i>Kashīr, A history of Kashmir, from the earliest times to our own</i>. New Delhi: Light and Life 1974</p>
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	(a) Preparation: 120 min (b) Revision/review: 120 min
履修上の注意	特になし。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18016
科目名・単位数	内陸アジア仏教文献学研究 4単位
時限	金曜日2時限目
担当教員氏名	斉藤 明 教授
授業題目	中観思想史研究
授業の目的・概要	周知のように、非有非無や不苦不樂の中道説は、仏教思想の基本的な立場を表明する。＜縁起＞を根拠にしたこの中道説は、2~3世紀のナーガールジュナ（龍樹）によってその意義が再認識され、『中論』を起点とする「中観」思想をもたらすことになる。4~6世紀には大乘仏教を代表する部派となった

	<p>瑜伽行・唯識学派と、6世紀以降のインド仏教史に多大な影響力をもった中観学派の両学派は、一面では、中道の本家争いともいえる活発な論議を展開した。他方、5世紀初頭の鳩摩羅什訳『中論』『十二門論』『百論』を基礎に、中国では6世紀後半以降、三論学派の成立を見た。この授業では、これらの背景を俯瞰したうえで、初期から後期に至るインド中観思想史とともに、中国仏教史およびチベット仏教史の展開に大きな影響を与えた中観思想を再考したい。</p>
到達目標	中観思想史を的確に理解することを目指す。
授業計画	<p>夏学期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 導入と解説</li> <li>2 中道説と「中観」思想</li> <li>3 インド中観思想史の時代区分をめぐって</li> <li>4 中観思想および中観思想史研究の最前線</li> <li>5-15 『三論玄義』講読</li> </ol> <p>冬学期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 復習と解説</li> <li>2-4 初期仏教と中道説</li> <li>7-14 『中観論疏』講読</li> <li>15 総括</li> </ol>
授業の方法	講義と関連テキストの講読を中心とし、必要に応じて関連資料を配布して利用する。積極的な質疑応答とディスカッションを期待している。
成績評価方法	平常点およびレポートにより、通年で評価する。
テキスト	プリント配布する。
参考文献	斎藤明他編『大乘仏教の誕生』（シリーズ大乘仏教2）春秋社, 2011.同編『空と中観』（同6）春秋社, 2012.
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には3時間、復習には1時間の時間をかけること
履修上の注意	丹念な予習・復習と、コンスタントな授業出席を望んでいる。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18017
科目名・単位数	内陸アジア仏教文献学演習 4単位
時限	水曜日2時限目
担当教員氏名	斉藤 明 教授
授業題目	インド仏教思想関連文献講読
授業の目的・概要	インド仏教思想史上の主要なテキストを講読する。今年度は『法華経』（第2章の一部）、『般若心経』（大本・小本）、ならびに中観思想を確立したナーガールジュナの著『中論』（一部）を丹念に読みながら、それぞれの内容を分析・考察する。当該経論の内容と背景、および研究史を解説しながら読み進める。サンスクリット語文法に関する基礎知識が望まれる。
到達目標	サンスクリット語で著された仏教論書の読解力を身につけるとともに、的確な内容理解を目指す。
授業計画	<p>夏学期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 導入と解説</li> <li>2-10 『法華経』（第2章の一部）講読</li> <li>11-15 『般若心経』（大本・小本）講読</li> </ol> <p>冬学期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 復習と解説</li> <li>2 『中論』と注釈文献</li> <li>3-14 『中論』（第1, 2, 13, 15, 18, 23, 24, 25, 27章）講読</li> </ol>
授業の方法	演習形式を基本とし、それぞれの文献の内容および研究史に関する解説を交える。授業では、テキストの読解ならびに内容に関する積極的な質疑応答とディスカッションを期待している。

成績評価方法	平常点およびレポートにより、通年で評価。
テキスト	H. Kern and B. Nanjio ed., <i>Saddharmapundarīka</i> , Bibliotheca Buddhica X, St-Petersbourg, 1908-1912; repr. Tokyo: Meicho-Fukyu-Kai, 1977. 『般若心経』（大本・小本）ならびに『中論』のテキストはプリント配布する。
参考文献	中村元・紀野一義『般若心経・金剛般若経』岩波文庫、1960。 渡辺章悟『般若心経—テキスト・思想・文化』大法輪閣、2009。 叶少勇『中論頌』（梵蔵漢仏典叢書）上海：中西書局、2011。 斎藤明「中観思想の成立と展開」『空と中観』（シリーズ大乘仏教6）春秋社、2012, pp. 3-41.
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には4時間、復習には1時間の時間をかけること
履修上の注意	地道な予習と、コンスタントな授業出席を望んでいる。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18018
科目名・単位数	東アジア仏教文献学研究 4単位
時限	木曜日3時限目
担当教員氏名	藤井 教公 教授
授業題目	『摩訶止観』研究2018
授業の目的・概要	『摩訶止観』は天台三大部の一書として知られ、全仏教の瞑想や観法などの実修を「止観」のもとに体系づけた書である。我が国には鑑真によってもたらされ、最澄も入唐の際に持ち帰っている。中国天台では湛然の『止観輔行伝弘決』以来多くの注釈書が作成され、我が国でも平安中期以降盛んに講究された。 本講はこの書を湛然や我が国の宝池房証真、癡空、守脱などの注釈書を手引きに講読し、東アジア仏教における実践体系を理解し、仏教全体の把握の一助とするのが目的である。
到達目標	テキストとその注釈書を読んで、漢文訓読に慣れて習熟するとともに、その内容を受講者自身の努力によって十分に理解することを目標とする。
授業計画	第1～2講 天台智顛の事績の概観、次に『摩訶止観』の成立、中国日本における流传について概説する。以降は受講者による輪読。 卷三上（テキスト第二冊、101頁）から読み始める。 第3～6講 釈名段の「相待」と「絶待」 第7～10講 釈名段の「会異」と「通三徳」まで。 第11～16講 体相段の「教相」と「眼智」まで。 第17～22講 体相段の「境界」まで。 第23～24講 体相段の「得失」まで。 第25～30講 撰法段の最後まで。
授業の方法	テキストの輪読形式で行う。本書には参考書や解説書が多くあるので、受講者は各自それらを利用して授業に備えてもらいたい。
成績評価方法	平常点（出席率を含む）にて通年で評価
テキスト	『摩訶止観』天台大師全集本を使用する。上記の湛然等の注釈書が会本になっていて便利である。コピーを配布する。
参考文献	教場で指示する。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には2時間以上、復習には2時間程度の時間をかけること。
履修上の注意	予習のうえ、出席励行のこと。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18019
科目名・単位数	東アジア仏教文献学演習 4単位
時限	木曜日2時限目
担当教員氏名	落合 俊典 教授
授業題目	日本仏教における厭世思想の系譜（『厭世論』『念仏要文抄』）
授業の目的・概要	仏教の基本的思想である四聖諦（苦・集・滅・道）にはこの世を苦と位置付けている。このようなことから一般的に仏教は厭世的、悲観的宗教であるとの見方がある。だが不思議なことに厭世と命名された書物は従来知られていなかった。真福寺の大須文庫に秘せられていた十一世紀の古写本には『厭世論』と書かれていた。蠹害のため容易に判読できないうが、概略文字とその意味が見えてきた。この『厭世論』の基底に流れる思想は、一遍が所持していた可能性のある『念仏要文抄』（仮題）に通底するものがある。「世」を厭うというその「世」は、「生」を厭離することであり、かつまた「性」への異常なまでの忌避感に巻き込まれている。しかし遁世者の内面に貫かれている本質は単に戒律を持つことだけではなく、「生」への異常なまでの欲望とその遮断へのものがきでもあった。このような日本仏教の系譜を辿っていく。
到達目標	近年新たに発見された齊志法師撰『厭世論』と『念仏要文抄』の「踊念仏和讃」を読み解いていく過程で、日本仏教に見られる厭世思想を理解することを到達目標とする。
授業計画	夏学期：①～③仏教における厭世思想。④真福寺蔵『厭世論』の紹介。⑤～⑮『厭世論』解読演習 冬学期：①日本仏教における一遍。②一遍の伝歴。③～⑤『一遍聖絵』を分析する。⑥『一遍語録』の伝承。⑦～⑭『念仏要文抄』にある「踊念仏和讃」の分析。⑮日本仏教における厭世思想。
授業の方法	演習形式で授業を進める。各自担当箇所の校訂・読解研究を準備してきてレジメを受講生の人数分コピーし配布する。担当していない受講生各人も共通理解のために積極的に発言することが望まれる。授業にあたっては基本的な辞書等の参考書を各人の机の上に置き、ノートパソコンを学内ネットにつなぎ、SATやCBETAなどにつないで異読を確認する。 なお、通常、電子辞書は有用であるが、旧漢字（正字）使用に慣れるために電子辞書の使用は禁止する。
成績評価方法	平常点（論文指導への積極参加）にて通年で評価
テキスト	授業の進捗度に応じて随時テキストをコピーして配布する。
参考文献	日本の絵巻『一遍聖絵』（中央公論社）。『一遍語録』（岩波文庫）。『中世禅籍叢刊』（臨川書店）。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には2時間、復習には2時間の時間をかけること
履修上の注意	研究テーマに関する事項をよく調べ、十分な学術知識の習得に努めることが望ましい。
連絡方法	初回の授業でメールアドレスを通知。

科目番号	18020
科目名・単位数	東アジア仏教文献学演習 4単位
時限	木曜日4時限目
担当教員氏名	藤井 教公 教授
授業題目	『維摩経文疏』研究2018
授業の目的・概要	本講は、天台智顛が晩年に晋王廣に献上するために著したとされる『維摩経文疏』を講読し、それによって智顛の教学思想を検討することを目的とする。『文疏』は智顛の最晩年の思想を窺うことのできる重要な『維摩経』注釈書であるが、同じ智顛の『維摩経玄疏』や湛然『維摩経略疏』などに比べてこれまで余り顧みられておらず、国訳もまだない。したがってまず文献を正確に読み進めていくことが必要なので、国訳の訳注原稿を作成しながらその原稿の検討を行うことにしたい。

到達目標	テキストとその注釈書を読んで、漢文訓読に慣れて習熟するとともに、その内容を受講者自身の努力によって十分理解することを目標とする。
授業計画	初めての受講者がある場合、『維摩経文疏』についての概略を講義し、その後を受講者の原稿発表という形式で演習を行う。したがって受講者は予め分担を決め、一定の書式で原稿を作成し、授業の際にその原稿を検討し、訂正して確定校を作成する。それがある程度の分量に達したならば、適当な媒体に発表することも考えている。本年度は2017年度の続き部分から講読していく。 第1～2講 『維摩経文疏』の解題 第3～11講 テキスト巻三の途中～末まで(479c18～483b24) 第12～30講 テキスト巻四の最初から途中まで(483c4～489a7)
授業の方法	演習形式でテキストを講読する。ローテーションを決め、毎回の発表者は分担部分の原稿を作成し、教場でそれを発表する。発表原稿はその場で検討し、添削修正し、それを本講における受講者全員の共通理解とする。
成績評価方法	平常点(授業中の発表を含む)にて通年で評価
テキスト	『新纂大日本統蔵経』巻18所収の『維摩経文疏』を使用する(コピーを教場にて配布)
参考文献	詳細は教場で指示するが、湛然の『維摩経略疏』は大正蔵テキストから該当部分を複写しておくこと。
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	予習には3時間、復習には1時間の時間をかけること
履修上の注意	出席励行のこと。発表者は必ず原稿を用意し、クラス全員に配布すること。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18021
科目名・単位数	汎アジア仏教文化学研究 4単位
時限	木曜日2時限目
担当教員氏名	後藤 敏文 教授
授業題目	古インド・イラン語文献演習
授業の目的・概要	(1) インド最古の文献『リグヴェーダ』を中心に、言語、宗教、思想に亘る文献学的訓練を行う。インドヨーロッパ語祖語、インドイラン祖語からの展開、歴史文法に特に留意する。第7巻、ヴァスィシュタ家の讃歌集から題材を採る。(2) ゴロアスター経聖典『アヴェスタ』から、古アヴェスタ語で書かれたテキストを材料に、研究の現状と今後の課題を押しさえ、研究に必要な諸項の確認に努める。
到達目標	インド、イランの最古の言語の姿に触れ、文法研究、文献研究のチェックポイントを確かめ、習得に努める。基本的な研究書、研究論文を普段から活用できる様にする。記録された最古のインド資料であるアショーカ王碑文を基に、インド・イラン祖語段階から中期インド・アーリヤ語への展開について、基本的流れと検証すべき諸項を身につける。
授業計画	<b>前期</b> 1-2 VII 33 ヴァスィシュタ (6詩節) 3-5 VII 41 バガ (7詩節) 6 VII 46 ルドラ (4詩節) 7 VII 49 水たち (4詩節) 8 VII 54 居住地の主 (3詩節) 9-11 VII 60 アーディテヤ (12詩節) 12-13 VII 65 ミットラ・ヴァルウナ (5詩節) 14-15 VII 77 ウシャス (曙) (6詩節)  <b>後期</b> 1-2 VII 81 ウシャス (曙) (6詩節) 3-4 VII 101 パルジャニヤ (雨) (6詩節)

	5-7 VII 82 インドラ, ヴァルウナ (10 詩節) 8-11 アヴェスタ Y29 (3 から終わりまで) 12-14 アショーカ王磨崖碑文から抜粋 15 同, 磨崖小碑文の例を見る
授業の方法	出席者全員に順番に音読して訳してもらおう。「パス」も可。その上で重要事項, 問題点を指摘し, 有益な研究書, 論文に言及する。出席者の意見, 解釈をなど, 積極的な発言議論を歓迎する。
成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	リグヴェーダ: Th. Aufrecht, <i>Die Hymnen des Rgveda</i> (Bonn 1877) に基づき, 韻律, 文法を考慮して復元テキストを用意し配布する。 アヴェスタ: Geldner の英語版 (1896), Humbach (1959) を基に, Hoffmann の文字解釈によるテキストを準備する。 アショーカ: Hultzsch, Bloch 等に基づき, コピーを用意する。
参考文献	J. Wackernagel, A. Debrunner, <i>Altindische Grammatik</i> . Göttingen 1896-1964. M. Mayrhofer, <i>Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen</i> . Heidelberg 1996-2001. K. F. Geldner, <i>Der Rig-Veda</i> . Cambridge, Mass. 1951. H. Graßmann, <i>Wörterbuch zum Rigveda</i> . Leipzig 1873 (重版多数) . T. Gotō, <i>Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background</i> . Wien 2013. B. Delbrück, <i>Altindische Syntax</i> . Halle 1889. K.F. Geldner, <i>Avesta: the sacred books of the parsis</i> , Part 1. Stuttgart 1896. H. Humbach, <i>Die Gathas des Zarathustra</i> . Heidelberg 1959. Chr. Bartholomae, <i>Altiranisches Wörterbuch</i> . Strassburg 1904. H. Reichelt, <i>Awestisches Elementarbuch</i> , Heidelberg 1909. K. Hoffmann-B. Forssman, <i>Avestische Laut- und Flexionslehre</i> . Innsbruck 1996, 2004. K. Hoffmann, <i>Aufsätze zur Indoiranistik</i> . Wiesbaden 1975, 1976, 1992. J. Kellens, <i>Le verbe avestique</i> . Wiesbaden 1984. E. Hultzsch, <i>Inscriptions of Asoka</i> . Oxford 1925. J. Bloch, <i>Les inscriptions d'Asoka</i> . Paris 1950. その他, Oldenberg, Hoffmann, Narten, Gotō, Kümmel, Sgall, Liebert, Wennerberg, Scarlata, Kellens, Renou などに言及することが多いが, その都度指示する。
準備学習 (予習・復習等) に必要な時間等	予習には, 授業内容を理解するための準備として 2 時間程度を予定する。間に合わない場合にも, 必要以上に長く時間をかけないこと。復習は 2 時間程度を目安とする。参加者の希望, 適性によっては, さらなる検討のために時間をかけることを妨げない。特に, 授業中に指示された研究文献を各自検討することを期待する。疑問点があれば, 授業時に参加者全員に提供してもらい, 検討することとする。
履修上の注意	サンスクリットの知識を前提とする。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18022
科目名・単位数	汎アジア仏教文化学演習 4 単位
時限	金曜日 3 時限目
担当教員氏名	後藤 敏文 教授
授業題目	ウパニシャッド, パーリ語文献選
授業の目的・概要	前期には, 比較的意味の取りやすいヴェーダ語散文の例として古ウパニシャッドを読み, 後のサンスクリット語, パーリ語などへの展開の基を学ぶべく努める。仏典に先行する時代の世界観に触れ, 理解に努める。後期はパーリ語のテキストから, 仏教の展開に重要な部分を選んで読む。
到達目標	文法, シンタクスの基本と, それらの検証方法を学ぶ。基本的語彙の確定と習得に努める。それによって, 各人が専門とする原典の文献学的, 文法的研究の基礎を習得する。ヴェーダ期から初期仏教にかけての思想, 世界理解展開を理解するための基本事項を原典に即して確認する。

授業計画	<p><b>前期</b>  1-6 Chāndogya-Upaniṣad 第6巻  7-10 Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad 第3巻  11-15 同 第4巻</p> <p><b>後期</b>  1-7 沙門果経 (Dīghanikāya II) から  8-15 Mahātaṇhāsankhayasutta (大愛尽経。Majjhima-Nikāya I 38: 256-271) から</p>
授業の方法	出席者全員に順番に音読して訳してもらう。その上で重要事項、問題点を指摘し、有益な研究書、論文に言及する。出席者の意見、解釈を歓迎する。原典を扱わない者が出席を希望する場合には、翻訳を準備して配布することも可能。ヴェーダ文献、パーリ語文献入門に役立ててもらえれば幸いである。積極的な発言議論を歓迎する。
成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	ウパニシャッドは代表的なエディションと、それらを校合したローマ字テキストをコピーして配布する。パーリ語テキストはPTS版に基づき、コピーを用意する。
参考文献	M. Mayrhofer, <i>Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen</i> . Heidelberg 1996-2001 B. Delbrück, <i>Altindische Syntax</i> . Halle 1889 W. Geiger, <i>Pāli Literature and Language</i> , transl. by Batakrishna Gosh, Calcutta 1943+, または, K.R. Norman による「改訂版」, Oxford (Pāli Text Society) 1994+. R. Pischel, <i>A grammar of the Prākṛit languages</i> , tr. from German by S. Jhā, 1981 ほか, インドにて再版多数。 T. Gotō, <i>Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background</i> . Wien 2013 など, 古インド・アーリヤ語 (サンスクリット語) 文法。 Rhys Davids and Stede, <i>Pali-English Dictionary</i> , 1921+. その他は授業中に紹介指示する。
準備学習 (予習・復習等)に必要な時間等	予習には授業内容を理解するための準備として2時間程度を期待する。ただし、十分準備に時間をとって臨みたい者の意思も排除しない。復習には2時間程度を目安とするが、授業内容を検討、消化するために時間をかけることを勧める。疑問点があれば、次回授業時、または、その他の時間に質問すること。
履修上の注意	集中的に準備、復習を行い、いたずらに時間を懸けないこと。わからない点は積極的に質問されたし。授業中に指示された研究書、論文などは、できるだけその日のうちに (たとえ詳しく読まなくとも) 目にしておく。準備が不十分なときにも出席して、必要に応じてノートをとるべし。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18023
科目名・単位数	近現代仏教研究（仏教学と生命倫理） 2単位
時限	集中講義（夏学期） ※日程は、別途お知らせします
担当教員氏名	土山 泰弘 講師（前埼玉工業大学教授）
授業題目	仏教と生命思想
授業の目的・概要	遺伝子操作や臓器移植など生命に関わる技術の進展は、現代の生命科学の大きな達成である。しかしそれが人間生活にもたらす意味については、さまざまな分野から問題提起がなされている。この問題を仏教との関わりにおいてどのように把握するかを検討するのがこの授業の目的であるが、そのためには、西欧近代における科学主義の思潮とそれに関わる議論の流れも振り返ってみる必要がある。この授業では生命思想という枠組みのもとで、ひろく仏教から見た生命に関する問題を考える。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生命倫理を問う現実の諸問題が多岐にわたることと、それに対してさまざまな思想的アプローチが可能であることを理解する。</li> <li>・生命倫理の問題が仏教の中にどのように位置づけられるかについて、理解を深める。</li> </ul>
授業計画	<p>&lt;生命倫理&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 生命倫理の諸テーマ</li> <li>2 生殖補助医療</li> <li>3 脳死と臓器移植</li> </ol> <p>&lt;科学技術論&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4 科学と価値</li> <li>5 科学と技術</li> <li>6 科学技術の変貌</li> </ol> <p>&lt;仏教の生命観&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7 古代インドの生命観</li> <li>8 有情論の背景</li> <li>9 生命</li> <li>10 胎児</li> <li>11 出産</li> <li>12 死</li> <li>13 植物状態</li> <li>14 安楽死</li> <li>15 生命倫理と仏教思想</li> </ol>
授業の方法	上記授業計画の内容に従って、関連資料を配付して概略を説明し、討論を行いながら、知識を深めていく。討論のなかで新しいテーマが出てきたときは、関連する資料を追加準備して次の回で扱う。授業の各回を通じて、いま問題にしている事項が仏教思想においてどこに位置するかという体系的な観点を考慮する。
成績評価方法	平常点にて各学期で評価
テキスト	プリントを配布する。
参考文献	<p>H. リッケルト『文化科学と自然科学』（佐竹哲雄訳）岩波文庫 1939年  青野由利『生命科学の冒険―生殖・クローン・遺伝子・脳』ちくまプリマー新書 2007年  Keown, Damien : Buddhism and Bioethics, London: Palgrave, 2001</p>
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には1時間、復習には3時間の時間をかけること
履修上の注意	特になし
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18024
科目名・単位数	近現代仏教研究（仏教学と環境問題） 2単位
時限	集中講義（冬学期） ※日程は、別途お知らせします
担当教員氏名	土山 泰弘 講師（前埼玉工業大学教授）
授業題目	仏教と環境思想
授業の目的・概要	今日の地球温暖化や野生生物の絶滅などの問題は、環境問題を地球規模のスケールで考察しなければならないことを示している。このような深刻な環境問題が生じてくる思想的な背景として、19世紀以来の科学主義的な思考があると考えられる。科学主義については、当時からその実体主義的な思考を批判して、人間生活の固有性を重視する見解があった。すなわち環境は所与のものとして現れるのではなく、主体の側からの了解と働きかけによってその姿を変えるという力動的な関係のもとで全体として把握する立場がそれである。環境も含めて人間を全体的に把握するという理解は、後に仏教思想に親和性を見出して、環境問題に対する仏教からのアプローチに期待する傾向を生じた。ただし仏教は独自の価値意識を持つから、この点を考慮しながら議論を積み重ねているのが現状であろう。この授業では環境問題に対する仏教思想の理解について、環境思想という枠組みの中で検討する。
到達目標	・現実の環境問題が多様であることと、環境問題に対してアプローチするときに価値論的な視点が重要であることを理解する。 ・思想として仏教をとらえたときに、仏教は環境問題を自身の体系のなかでどのように扱うかについて理解を深める。
授業計画	<p>&lt;環境倫理&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 環境倫理の諸テーマ</li> <li>2 公害病</li> <li>3 地球環境問題</li> <li>4 放射能汚染</li> </ol> <p>&lt;現代社会と自然&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>5 自然の意味</li> <li>6 世俗化と宗教</li> <li>7 現代の環境思想</li> </ol> <p>&lt;仏教の自然観&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>8 古代インドの自然観</li> <li>9 不殺生</li> <li>10 植物</li> <li>11 自然に対する実際の働きかけ</li> <li>12 自然に対する価値判断（1）（理論的側面）</li> <li>13 自然に対する価値判断（2）（実践的側面）</li> <li>14 仏性</li> <li>15 環境倫理と仏教思想</li> </ol>
授業の方法	授業は、上に述べた幾つかの大きなテーマに関連する資料を紹介してその概略を説明し、出席者の間で意見を交換しながらより個別のテーマに絞り込み知識を深めるという方法をとる。個別のテーマを扱うときでも、常に環境問題全般に通ずる観点のもとで考察を深めていく。
成績評価方法	平常点にて各学期で評価
テキスト	プリントを配布する。
参考文献	和辻哲郎『風土—人間学的考察』 岩波文庫 1979年 加藤尚武『新・環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー 2005年 原実『不殺生考』国際仏教学大学院大学研究紀要 1（1998）pp. 1-37. Schmithausen, Lambert : Buddhism and Nature, Studia Philologica Buddhica Occasional Paper Series VII, The International Institute for Buddhist Studies of the International College for Advanced Buddhist Studies, Tokyo, 2003
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には1時間、復習には3時間の時間をかけること
履修上の注意	特になし
連絡方法	初回の授業で説明する

---

関連科目

---

科目番号	18025
科目名・単位数	比較宗教・比較文化 4単位
時限	月曜日4時限目
担当教員氏名	藤森 馨 講師（国士舘大学教授）
授業題目	平安祭祀制度と中世神道
授業の目的・概要	平安祭祀制度と中世の神道思想について文献も取り上げつつ検討したい。
到達目標	平安時代に誕生した祭祀制度について考察したい。神仏習合を前提とした中で、神道と仏教がどのように相互補完したか、神仏隔離を行ったかについても検討したい。
授業計画	<p>夏学期 (1) - (3) 十六社の成立  (4) - (5) 祈年穀奉幣  (6) - (7) 公祭とは  (8) - (11) 伊勢神宮の祭祀  (12) - (13) 公卿勅使の成立  (14) - (15) 夏学期のまとめ</p> <p>冬学期 (1) 宮廷祭祀の中世的展開  (2) - (5) 祈年祭の展開  (6) - (9) 二神約諾神話と皇室・摂関家  (10) - (11) 祭主の勢力伸長  (12) - (13) 真名鶴神話の展開  (14) - (15) 冬学期のまとめ</p>
授業の方法	テキストや文献を輪読する。
成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	岡田荘司編『日本神道史』（吉川弘文館） コピーを配布します。
参考文献	『古代の天皇祭祀と神宮祭祀』（吉川弘文館）
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習2時間。復習2時間。
履修上の注意	文献読解力を身につけていることが望ましい。
連絡方法	事務室を経由して連絡。

仏教学特殊研究

科目番号	18101
科目名	仏教学特殊研究
時限	水曜日3時限目(夏学期)
担当教員氏名	<p>代表者： 藤井 教公 教授          落合 俊典 教授 後藤 敏文 教授          斉藤 明 教授 デレアヌ フロリン 教授          藤井 教公 教授</p> <p>松田 和信 講師(佛教大学教授 6月6日担当)          護山 真也 講師(信州大学准教授 6月20日担当)          藤井 淳 講師(駒澤大学准教授 7月11日担当)</p>
授業の目的・概要	<p>本学教員、並びに外部講師と受講者の学生諸君が、現在取り組んでいる仏教学上の研究テーマ、トピックについて研究発表し、それについて全員による質疑応答を行う。その討議を通じて各人が仏教に対する知見を深めることを授業の目的とする。またこの授業を学生諸君にとっての学会発表、論文作成の訓練の場とする。</p>
到達目標	<p>学生諸君が自ら発表し、あるいは他の受講者の発表を聞いて、研究発表に慣れるとともに、自身の発表の態度や技術などの向上を目指す。また、仏教学上の諸問題について知見を広め、深い理解に達することを目標とする。</p>
授業計画	<p>初回の時に、教員、学生ともに発表の順番と日程を決め、各自一時間内外を持ち時間として、全体で質疑応答、討論を行う。</p>
授業の方法	<p>初回の授業の時に予め発表者を決める。発表予定者は配付資料などを各自が用意してパワーポイント、スライド、紙資料など、各自それぞれの方法を用いて発表する。</p>
成績評価方法	<p>履修単位は設定されていない。</p>
テキスト	<p>発表担当者が各自用意し、配布する。</p>
参考文献	<p>発表担当者がその都度指示する。</p>
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	<p>事前に発表資料やテーマが明らかになっている場合、予習には1時間程度、復習には1時間程度の時間をかけること。</p>
履修上の注意	<p>全学生は目的意識をもって必ず参加すること。</p>
連絡方法	<p>初回の授業で説明する。</p>

科目番号	18102
科目名	仏教学特殊研究
時限	水曜日3時限目(冬学期)
担当教員氏名	<p>代表者： 齊藤 明 教授          落合 俊典 教授 後藤 敏文 教授          齊藤 明 教授 デレアヌ フロリン 教授          藤井 教公 教授</p> <p>山口 弘江 講師(駒澤大学准教授 10月31日担当)          苫米地 等流 講師(人文情報学研究所主席研究員          12月5日担当)          米澤 嘉康 講師(大正大学准教授 2月6日担当)</p>
授業の目的・概要	本学教員、外部講師、ならびに学生が、現在取り組んでいる仏教学上の研究テーマについて発表を行い、質疑応答と討論を通じて、仏教学に関する知見を深めることを目的とする。同時にまた、論文作成および学会発表の訓練の場として重要な意義をもつ。
到達目標	学生諸氏が研究発表に慣れるとともに、仏教学上の諸問題に関する知見を広め、理解を深めることを目標とする。
授業計画	初回の授業で、教員および学生が発表の順番と日時を決め、順次、現在取り組んでいる研究テーマに関する発表を行う。
授業の方法	発表者はパワーポイント、スライド、配布資料などを用い、一時間程度を持ち時間として発表を行う。その上で、出席者全員による質疑応答と討論を行う。
成績評価方法	履修単位は設定されていない。
テキスト	各回、発表担当者がレジメを用意し、配付する
参考文献	必要に応じて発表担当者が指示する。
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	必要に応じて予習には1時間程度、復習には1時間程度の時間をかけること。
履修上の注意	全学生は、目的意識をもって必ず参加すること。
連絡方法	初回の授業で説明する

科目番号	18103
科目名・単位数	日本語 I 4単位
時限	火曜日3時限目・金曜日3時限目
担当教員氏名	宮田 聖子 講師（東京工業大学非常勤講師）
授業題目	初級・中級前期の日本語 —初級文型とその応用—
授業の目的・概要	日本語レベル初級及び中級初期（学習時間0～400時間未満）の学生を対象に行う。 日本語の基本構造を習得し、四技能（話す・聞く・読む・書く）を養う活動へ発展させる。自分の意見をまとめ発表する力を身につける。 日常生活や学内での基本的な活動が問題なく行える日本語コミュニケーション能力の獲得を目指す。
到達目標	日本語能力試験N2レベルの日本語の力の獲得
授業計画	夏学期 第1週（1・2回）：初級文型1・「話す・聞く」技能 第2週（3・4回）：初級文型2・「話す・聞く」技能 第3週（5・6回）：初級文型3・「話す・聞く」技能 第4週（7・8回）：初級文型4・「話す・聞く」技能 第5週（9・10回）：初級文型5・「読む・書く」技能 第6週（11・12回）：初級文型6・「読む・書く」技能 第7週（13・14回）：初級文型7・「読む・書く」技能 第8週（15・16回）：初級文型8・「読む・書く」技能 第9週（17・18回）：初級文型9・四技能 第10週（19・20回）：初級文型10・四技能 第11週（21・22回）：中級文型1・四技能 第12週（23・24回）：中級文型1・四技能 第13週（25・26回）：中級文型2・四技能 第14週（27・28回）：中級文型3・四技能 第15週（29・30回）：中級文型4・四技能  冬学期 第1週（1・2回）：中級文型5・四技能 第2週（3・4回）：中級文型6・四技能 第3週（5・6回）：中級文型7・四技能 第4週（7・8回）：中級文型8・読解・論述 第5週（9・10回）：中級文型9・読解・論述 第6週（11・12回）：中級文型10・読解・論述 第7週（13・14回）：総合1・読解・論述 第8週（15・16回）：総合2・読解・論述 第9週（17・18回）：総合3・読解・論述 第10週（19・20回）：総合4・読解・論述 第11週（21・22回）：総合5・読解・論述 第12週（23・24回）：総合6・読解・論述 第13週（25・26回）：総合7・読解・論述 第14週（27・28回）：総合8・プレゼンテーション 第15週（29・30回）：総合9・プレゼンテーション
授業の方法	テキストを使用し、初級前半においては、予習確認の小クイズ、文法の学習、応用練習を行う。読解の授業では語彙クイズ、読解、文法確認、討論、作文、発表の順に行う。また、毎回宿題を課す。
成績評価方法	平常点またはレポートにて通年で評価

テキスト	受講生の日本語レベルに応じて決定する。
参考文献	『TRY! 日本語能力試験N3 文法から伸ばす日本語』アスク出版、『中級日本語文法要点整理 ポイント20』スリーエーネットワーク
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習に2時間程度、復習に2時間程度の時間をかけること
履修上の注意	出席励行。宿題を必ず提出すること。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18104
科目名・単位数	日本語Ⅱ 4単位
時限	火曜日2時限目
担当教員氏名	宮田 聖子 講師（東京工業大学非常勤講師）
授業題目	中級後期・上級の日本語 ー学術的活動へー
授業の目的・概要	日本語レベル中級後半（初級基礎文型の習得が終了しており、学習時間が概ね450時間程度）以上の学生を対象に行う。 学術論文の読解ストラテジーを獲得する。また、討論、論評する活動を通してテーマについて論述するスキルと、それを口頭発表するプレゼンテーションスキルを養う。 日本での研究活動が十分に行えるより高度な日本語能力の獲得を目指す。
到達目標	日本語能力試験N1レベルの日本語力の獲得
授業計画	夏学期 第1回：文法1 第2回：文法2 第3回：文法3 第4回：文法4 第5回：文法5 第6回：文法6 第7回：文法7 第8回：読解1 第9回：読解2 第10回：読解3 第11回：読解4 第12回：読解5 第13回：読解6 第14回：読解7 第15回：読解8  冬学期 第1回：試験対策1 第2回：試験対策2 第3回：試験対策3 第4回：試験対策4 第5回：試験対策5 第6回：試験対策6 第7回：試験対策7 第8回：作文指導1 第9回：作文指導2 第10回：作文指導3 第11回：作文指導4 第12回：作文指導5

	第 13 回：プレゼンテーション指導 1 第 14 回：プレゼンテーション指導 2 第 15 回：プレゼンテーション指導 3
授業の方法	テキストを用いて、予習を確認する小クイズ、読解作業、文法事項確認、討論、作文を行う。
成績評価方法	平常点またはレポートにて通年で評価
テキスト	受講生のレベルに応じて決定する。
参考文献	『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習に 2 時間程度、復習に 2 時間程度の時間をかけること
履修上の注意	出席励行。宿題を必ず提出すること。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18105
科目名・単位数	古文・漢文読解 I 4単位
時限	水曜日4時限目
担当教員氏名	田戸 大智 講師（早稲田大学非常勤講師）
授業題目	仏教漢文読解入門
授業の目的・概要	<p>仏教では後漢の頃より仏典の漢訳が開始され、多くの漢訳仏典やそれにもとづく註釈書などが生み出された。仏教思想を解明するためには、正確な読解が要求されることは贅言を要しない。</p> <p>本講義では、伝統的な訓読法を用いて、仏教漢文が読解できるようになることを目的としている。日本では漢文を日本語で解釈するための訓読法が体系化され、仏教漢文もまたこの方法によって理解されてきた。訓読法を習得すれば、文法構造を把握する能力が高まり、感覚的に読むことで起きる間違いを防止できる利点がある。特に日本仏教研究を行うためには、訓読法を習得することが必須である。</p> <p>そこで、訓読による仏教漢文の読解を修練していくために、テキストに記される基本文法を適宜参照しながら、様々な仏教漢文を取り上げ、実践的に訓読法を学習していきたい。前期は主に経典や論書など、後期は中国の伝記史料や日本の仏教漢文などを読み進めていく予定である。</p>
到達目標	日本の凝然（1240～1321）が撰述した『八宗綱要』上下2巻（大日本仏教全書3所収）を訓読できる能力の修得を到達すべき目標としたい。
授業計画	<p>前期</p> <p>1 ガイダンス</p> <p>2~3 『過去現在因果経』（訓読の基本文法を各講義で適宜解説）</p> <p>4~5 『六度集経』・『太子須大拏経』</p> <p>6~7 『金剛般若経』・『大般若経』</p> <p>8~9 『無量寿経』・『阿弥陀経』</p> <p>10~11 『華嚴経』・『法華経』</p> <p>12~13 『勝鬘経』・『大般涅槃経』</p> <p>14~15 『大智度論』・『中論』</p> <p>後期</p> <p>1~2 『梵網経』・『理惑論』</p> <p>3~4 慧皎『高僧伝』・道宣『統高僧伝』</p> <p>5~6 道宣『集神州三宝感通録』</p> <p>7~8 吉蔵『法華義疏』・基『大乘法苑義林章』</p> <p>9~10 最澄『顕戒論』・空海『即身成仏義』</p> <p>11~12 法然『選択本願念仏集』・明恵『摧邪輪』</p> <p>13~15 凝然『八宗綱要』・『三国仏法伝通縁起』など</p>
授業の方法	毎回配付する資料にしたがって授業を進める。漢文はすべてノートに書き写し、返り点を付したり書き下し文に直す作業を繰り返し行う。また声に出して読むことで漢文のリズムを習得する。語彙が不明である場合は、常に漢和辞典や仏教辞典で調べるよう訓練する。
成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	プリントを配布する。この他、『句形演習 新・漢文の基本ノート〈二色刷〉』（日栄社、1998）と『新・要説文語文法〈五訂新版〉』（日栄社、2015）を必携とする。
参考文献	加地伸行『漢文法基礎—本当にわかる漢文入門—』（講談社学術文庫、2010）、金岡照光『仏教漢文の読み方』（春秋社、1978）、木村清孝編著『仏教漢文読本』（春秋社、1990）、その他、各辞典などは教場にて指示する。

準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	講義で配付した資料は、予習と復習を通して繰り返し読み込むことが実力の向上につながる。訓読の基本文法はテキストを適宜参照して解説するが、演習問題は各自復習して頂きたい。予習には120分、復習には120分の時間をかけること。
履修上の注意	①授業では漢文訓読を実習形式で行うので、専用ノートを準備して予習と復習を必ず行う。 ②電子辞書や電子機器類の使用は禁ずる。語彙は必ず辞書で調べるようにする。 ③「古文・漢文読解Ⅱ」の講義を併せて聴講することが望ましい。
連絡方法	メール（初回の授業で確認する）

科目番号	18106
科目名・単位数	古文・漢文読解Ⅱ 4単位
時限	水曜日5時限目
担当教員氏名	小島 裕子 講師（明治大学兼任講師）
授業題目	仏典訓読初学講座
授業の目的・概要	<p>仏典の漢文は記載言語として表わされた古典語（文語）で、たとい現代中国語を母国語として自在に使用しているとしても、その特殊な文章構造の分析を介した完全な理解という点では次元を異にしよう。こと日本においては、漢字文化の受容とともに古くから「訓読」という、日本語によって漢文の文章構造を分析し、正確に文意を解釈するための学問が培われてきた。</p> <p>本講座は、漢文訓読のなかでも、特に寺院文化圏における学僧が行ってきた仏典訓読の学問を視野に入れ、訓読のなかでもとりわけ学ぶ機会の稀な「漢訳仏典に対する伝統的な訓読法」の習得をめざす。特に、漢文を訓読し内容を理解する上で必要な、基礎としての「古典文法（文語）」の解説に重点を置き授業を行う。</p> <p>仏教辞典における要語解説の表記を読み解きながら、解説に引用された典拠となる仏典の当該箇所を確認し、実例文献に基づく訓読法（訓点を付して訓読する方法）を教授する。またこれに併行し、訓読に有用な主要辞典（仏教学系・国語系）の使用方法について教示したり、訓読に対する理解を深めるための「日本語表記の変遷」などにも言及したりすることで、文献資料学を究める受講者各自の研究の将来に資する講義でありたい。</p>
到達目標	<p>貴重な仏教文献資料を詳細に読み解いてゆくために必要とされる日本語表記の習得、各種仏教辞典の特徴を把握し、要語項目を読解して実際の研究に生かす能力を身につけることをめざす。</p> <p>漢文の白文に訓点を付す方法を習得して実際の研究に備え、併せて仏教に関連する文献を〈声に出して読める力〉も養いたい。</p>
授業計画	<p>《夏学期》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 初回到授業の指針を述べる。「望月仏教大辞典」から要語を選び、引用された漢文の訓読体を正しい文法理解によって読むことができるか、また旧漢字の表記に対応できるかなどの問題定義を行ない、以後の具体的な授業に臨む姿勢を確認する。</li> <li>2 「訓読」という学問① 大正新脩大蔵経の漢訳仏典に対する国訳一切経・国訳大蔵経・新国訳大蔵経・仏典講座等の紹介、解説。</li> <li>3 「訓読」という学問② 具体的に学僧が訓点を付した写本・版本を紹介し、「訓読」とは何かを学ぶ意識を備える。</li> <li>4 自ら「訓読」を行うために必要な主たる仏教学系辞典、および国語学系辞典の紹介した上で、活用の実践に入る。</li> </ol> <p>以下、5回より演習と講義  講義前半：仏典に頻出する【「動詞活用表」作成プロジェクト】  『華嚴経』（八十卷、実叉難陀訳）「当願衆生」偈  講義後半：仏典に頻出する「為～所」について『法華経為為章』</p>

	<p>(慈恩大師基述) を用いて集中的に講義</p> <p>5-6 「当願衆生偈」の分解—「仮定表現」、動詞・助動詞の型</p> <p>7-9 「所」の様々な事例・訓読、関連の文法</p> <p>10-12 「為」動詞 (～となる)</p> <p>13-15 「為」介詞 (～のために)</p> <p>《冬学期》</p> <p>講義前半：仏典に頻出する【「動詞活用表」作成プロジェクト】 『法華経』「観世音菩薩普門品」(鳩摩羅什訳)「称名」段</p> <p>講義後半：仏典に頻出する「否定副詞」について集中的に講義</p> <p>16-17 「称名段」の分解—仮定表現・動詞・助動詞の型</p> <p>18 副詞の種類—「時間」「範囲」「程度」「状態」「語気」</p> <p>19-21 仏典に頻出する「否定副詞」事例・訓読①、関連の文法</p> <p>22-24 仏典に頻出する「否定副詞」事例・訓読②、関連の文法</p> <p>25-27 仏典に頻出する「否定副詞」事例・訓読③、関連の文法</p> <p>28-29 仏典に頻出する「否定副詞」事例・訓読④、関連の文法</p> <p>30 年度内総括 今年度の「動詞活用表」の完成</p>
授業の方法	<p>講義と演習(習熟のための練習)を繰り返すことで、リテラシーの向上をはかる。一回の講義を前・後半に分け、講義前半は年間を通したテーマに基づく演習の蓄積を行う。一般古典の文法書に挙がる用例では不十分な「仏典に頻出する動詞」について、その活用と仮名訓(読み)を一覧できる独自の【「動詞活用表」作成プロジェクト】を受講生とともに遂行し、当該教室における成果として構築してゆく。表の作成は文字の記入のみに止まらず、声に出して復唱する実践を伴うことで、記憶的な効果へと繋ぐ。これは前年度の試行を経て、本年度から本格的に実施する計画である。講義後半は「仏典に頻出する表現」について、二期各々集中的に取り組むテーマを掲げ、講義を行う。夏期は「為～所」、冬期は「否定副詞」を中心に、関連する周辺の文法についても適宜解説を加え、総じて広く訓読の事例にふれ得るようにする。</p>
成績評価方法	<p>毎回の講義における理解度(平常点)により、総合的に評価する。</p>
テキスト	<p>望月信亨『仏教大辞典』の要語項目の複写を主要テキストとして配布する。加えて仏典資料などを配布する。文語文法の解説書として『新・要説文語文法(五訂新版)』(日栄社)、辞書として『新版古語辞典(机上用)』(角川書店)を各自の必携とする。</p>
参考文献	<p>中村元『仏教語大辞典』、望月信亨『仏教大辞典』、織田得能『仏教大辞典』、宇井伯壽『仏教辞典』、『日本仏教語辞典』(岩本裕)ほか各種仏教辞典。『日本国語大辞典(第二版)』(小学館)、『日本語文法大辞典』(明治書院)、『新大字典(普及版)』(講談社)、『漢字源(改訂第五版)』(学研)など各種国語辞典。上記以外の辞典についても、講義時に随時、紹介してゆく。</p>
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	<p>各自、毎回の講義で配布する参考資料のファイリングし、受講前の予習として必ず目を通した上で授業に参加すること。蓄積されてゆく資料を重ねて通読することを通して、次第に理解は深まる。受講後は必ず授業内容を反芻し、次回の授業に備えること。準備学習として、予習に120分、復習に120分程度の時間を要する。</p>
履修上の注意	<p>本講座は、仏教文献資料学を遂行するために必要な基礎を学ぶ、留学生の読み書き、リテラシー向上をめざして開設する。日本語習得のステップを踏みながらの受講であることを配慮し、説明などは懇切に行ってゆくことを心がけるが、基礎を修めるといふことにおいて、日本語を母国語とする者と何らレベルの上で変わらぬ有益な内容を提示することを断っておきたい。</p> <p>継続履修の意義を念頭に、毎回の講義で具体的に訓読する仏典の文例は常に新規を提示してゆく。併設される「古文・漢文読解Ⅰ」とともに受講することが望ましい。</p>
連絡方法	<p>初回の授業で説明する。</p>

科目番号	18107
科目名・単位数	サンスクリット語 4単位
時限	金曜日2時限目
担当教員氏名	後藤 敏文 教授
授業題目	サンスクリット語入門
授業の目的・概要	どの時代、地域の仏教思想、文献を扱う上でも、サンスクリット語の知識、ことばそのものの分析方法、辞書や文法書等の検索法などを学んでおくことが求められる。サンスクリット語文法も他の言語の文法と同じく、我々の脳の働きに呼応するルール的一种であり、最小限の大筋（幹）を学んでおき、将来、必要に応じて枝や葉を正しい場所に配置したり、探したりする工夫をすればよい。教科書の規範、理屈に囚われず、我々の頭の中にある「文法」を活かせるように、必要な事項に集中し、簡素な構造に還元して学べるよう努力する。
到達目標	サンスクリット語の基本事項を学び、文法、辞書、基本的参考書に亘って、将来必要に応じて調べられる能力を備える。
授業計画	<p><b>前期</b></p> <p>1 導入と序論。「古インド・アーリヤ語」と「サンスクリット語」。インド・アーリヤ語の主な流れ：ヴェーダ語、「仏教梵語」、パーリ語などの中期インドアーリヤ語。</p> <p>2-3 デーヴァナーガリー文字。</p> <p>4-6 音韻論とサンディ。</p> <p>7-8 名詞型活用, -a- 語幹。</p> <p>9-12 名詞型活用, -a- 語幹以外の語幹。</p> <p>13-15 名詞型活用復習</p> <p><b>後期</b></p> <p>1-3 代名詞活用, 数詞。</p> <p>4 動詞組織の概要</p> <p>5-7 -a- 語幹現在活用</p> <p>8-10 その他の現在活用。</p> <p>11-13 完了, アオリスト, 二次的現在活用, その他。</p> <p>14-15 易しい例文を基に総復習</p>
授業の方法	ゴンダ『サンスクリット語初等文法』を手引きに、解説を加える。同書の練習問題を中心に翻訳の訓練を行う。プリント、小テストを準備する。
成績評価方法	平常点にて通年で評価
テキスト	J. ゴンダ著, 鎧淳訳『サンスクリット語初等文法』春秋社
参考文献	A. A. Macdonell, <i>A Sanskrit Grammar for Students</i> , 3 <sup>rd</sup> ed., London 1927 (インド, イギリスからのリプリント版多数あり) Toshifumi Gotō, <i>Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background</i> , Wien 2013
準備学習(予習・復習等)に必要な時間等	予習復習に各2時間程度を予定する。ただし、時間よりも集中力を発揮した学習を求める。復習を重視し、質問を期待する。
履修上の注意	重要な文法事項に集中し、我々の頭の中に備わっている「文法」に合わせ、理屈を理解すべく努める。調べれば解る事柄は無理に覚え、必要などきに調べられるよう準備しておく。大切なことはやがて頭に残るものと考え、同じことでも何度も質問確認すること。他のサンスクリット文法、入門書にいたずらに頼らないこと。
連絡方法	初回の授業で説明する。

科目番号	18108
科目名・単位数	古典チベット語 4単位
時限	金曜日4時限目
担当教員氏名	齊藤 明 教授
授業題目	古典チベット語入門
授業の目的・概要	チベット語には大別して、およそ8世紀以降の文献や碑文に記された文語と、現在の中国チベット自治区およびその周辺諸省、ならびにネパール、ブータン、インド等の中国以外の地で話される口語とがある。ここにいう「古典」チベット語とは、主に8世紀から18世紀頃までの仏典を中心とする諸文献・碑文が用いるチベット文語をさす。授業では、この古典チベット語文法を講義し、受講者がチベット人の撰述文献とともに、チベット語翻訳仏典を読むための基礎力を養うことを目的とする。
到達目標	古典チベット語文法の基礎を学び、チベット撰述文献および翻訳仏典を読むための、的確な読解力を得ることを目標とする。
授業計画	夏学期 1-2 導入と序論 古典チベット語とは何か。チベット語の文字と文法。仏典チベット語訳の特性、辞書と文法書他。 3-10 選文講読（『法華経』） 11-15 同（『般若心経』大本） 冬学期 1-2 単文と複文 3-15 選文講読（『中論』）
授業の方法	講義を中心とし、部分的に資料を配布して講読を行う。参考文献ならびに関連研究は授業の中で紹介する。
成績評価方法	平常点およびレポートにより、通年で評価。
テキスト	プリント配布する。
参考文献	・星泉『古典チベット語文法—『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. ・山口瑞鳳『概説チベット語文典』春秋社, 2002.
準備学習（予習・復習等）に必要な時間等	予習には4時間、復習には1時間の時間をかけること
履修上の注意	地道な予習と、コンスタントな授業出席を望んでいる。
連絡方法	初回の授業で説明する。